

Title	公立中学校における教育行為の階層差に関する研究
Author(s)	伊佐, 夏実
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/26237
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について＜/a> をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

〔 題 名 〕 公立中学校における教育行為の階層差に関する研究

学位申請者 伊佐 夏実

本研究の目的は、公立の中学校において、教師の日常的な教育行為の中に生徒の出身階層による影響がどのようにあらわれているのかを明らかにし、そのことを通して、社会的不平等の再生産において学校や教師が果たす役割についての示唆を得ることである。以下、全6章の内容を要約する。1章では、先行研究の検討を通して、本論で明らかにすべき課題について確認した。そもそも日本では、クラスルームや教育行為研究の枠組みのなかに階層要因がほとんど組み込まれていないという問題点があるものの、欧米との比較において日本的排除の図式として考えられるのは、「たてまえとしての平等主義」のもとで生徒の家庭背景が無化されることである。そしてまたこうした図式は、教師が管理・統制を弱め、生徒個人を支援するといったポストモダンな教育の在り方のなかで、その意図とは裏腹により強固になりつつもある。さらに、こうしたポストモダンな変化は、学校の社会化機能を弱める方向でも作用しているため、制度としての学校教育がもつ公正や平等の実現という目標はさらに後方に押しやられる可能性が示唆された。

以上を踏まえた上で本論では、階層的背景の異なる2つの公立中学校における長期間にわたるフィールドワーク調査および、生徒、保護者を対象にした学力調査・質問紙調査の分析を通して、生徒の学校経験、家庭での子育て、「現場の教授学」、それぞれにおいて社会階層間の差異がどのように現象化しているのかを明らかにしたうえで、階層に応じた教育行為のあり方と、社会的不平等の再生産の関係性についての試論を展開した。

2章では、対象となった2つの中学校の日常の営みを記述することで、生徒や保護者、そして教師の行為のあり方について、そのコントラストを描いた。経済的にも豊かな層が多く、比較的落ち着いた地域として評判の高い北中の生徒は、学力調査の結果も市内では上位に位置するが、勉強に対する生徒の意識の高さは、教師によって「点取り虫化している」といった否定的な評価が下されるものでもある。そして、教師の指導はかなりの程度、保護者からの要求の高さに拘束されている。警察の介入を余儀なくされるような一部の生徒による問題行動は生じるものの、淡々と日々を過ごしていく大多数の「まじめ」な生徒の存在によって、学校が大きく崩れるといった事態に至ることはない。一方、「愛情不足でかまってほしい子どもが多い」と表現される南中では、勉強をしないことや、基本的な生活習慣の乱れといった課題はあるものの、比較的のんびりとした雰囲気の中で、「面倒見の良さ」を自らの教職アイデンティティとする教師と生徒の間に濃密な関係が結ばれていた。そして、保護者から学校に寄せられる「クレーム」がほとんど存在しないため、その分教師の指導の自由度は高い。ただし、「抱え込み型」の指導を行う教師が次々と転勤していくことは、市内でも有数の「しんどい学校」である南中の問題を浮かび上がらせるには十分であった。3章以下では、2章で描いた内容をさらに掘り下げる形で、生徒、保護者、教師の3者についてそれぞれ具体的な分析を行った。

出身階層による生徒の学校経験の差異について検討した3章では、特に、これまで日本の生徒文化研究の領域で支配的であった地位欲求不満説を再考した。中学校生活を通して、業績主義的競争へと焚きつけられていく北中生に対して、アスピレーションの過熱がほとんど見られず、競争にのらない層として存在している南中生。こうした南中生の姿は、20数年前に観察されたものとはほぼ変わらないものとして考えられ、その点、大衆的競争状況の弛緩によって、社会階層下位の子どもたちの学習意欲が低下したという従来の指摘には疑問が生じる。すなわちそもそも、学歴獲得競争に参加することによって得られる高い地位達成を望まないことが、「普通の大人への移行過程」として自明視されている南中のような校区の生徒にとっては、勉強することの意味を受験などの外的要因に求めることはほとんど意味をなさないのである。また、南中の場合、成績という一元的価値が生徒の中に内面化されているわけではないために、業績主義による学校適応モデルの有効性が疑われる。そのため、南中が市内でも有数の「しんどい学校」として、生徒指導上の課題の多さが問題とされるのは、地位欲求不満によるものと言うよりは、文化葛藤の産物であることが示唆された。

こうした異なる生徒の特徴は、学校内プロセスによって生じている側面とともに、再生産の場としての家庭教育の在り方による部分も大きい。そのため4章では、保護者対象の質問紙調査の分析を中心とし、教育期待、養育行動、学校関与の3側面から、社会階層間の子育て様式の差異について、どのような点にそれが見出されるのかを検討した。両校の保護者間でもっとも顕著な違いがみられたのは、進路意識や学歴志向意識であった。計画的に教育費を蓄え、子どもにより高い学歴の獲得を望む北中保護者に対して、幸せな生活と学歴の獲得は別物と考える南中保護者の子育てスタイルは、子どもへの消費財の与え方からも判断されるように、やや放任主義的な側面があり、「教育する家族」とは異なるものとしてうつる。南中保護者の子どもの進路希望が、20年前からほとんど変化がないことから読み取

れるように、「競争にのらない層」としての南中生の背後には、こうした子育ての差異が存在していると言える。

5章では、それぞれの学校における生徒や保護者の特徴を教師がどのように認識しているのか、それによって、教師―生徒の相互関係や統制の手法にいかなる違いがみられるのかを検討した。まず北中では、他者との関係性の持ち方に慎重で傷つきやすく、大人と交渉する子ども像が共有されている。また、保護者に関しては、子どもの教育への関心とアカウンタビリティの要請の高さがあり、教師と生徒は互いにあまり立ち入らず、一定の距離を保ちながら、教師による強制や命令的コントロールは極力さけられるべきものとして捉えられている。そのためそこでは、「指導のソフト化」といったポストモダンな変容が見られ、「基準の外部化」による「ぶつからない統制システム」が構築されていた。他方南中では、人懐っこく素直で、権威に同調しやすい子どもと、学校のなかでの教師の指導に対してあれこれと細かく監視するような傾向にない保護者の存在によって、教師中心で生徒と衝突し、情緒的資源を活用した人格的コントロールによる「つながる指導」が展開されていた。こうした差異は、現代的な人間関係上の規範の浸透が社会階層間で異なることや、家庭のなかでの親子関係、学校関与の在り方といった階層文化を反映したものとして捉えられるのであり、以上のことから、教師の対生徒、対保護者へのまなざしには社会階層要因が入り込んでおり、それによって、異なる教育行為が展開されているということが明らかとなった。では、階層に応じた教育行為の展開は、学校における社会的不平等の再生産という論点に対していかなる意味をもつのか。終章ではこの点について以下のように結論づけた。

まず、保護者に対する説明責任を強く求められる北中では、それを満たすために、問題行動を起こすか/起こさないかという一元的な尺度に基づく指導の画一化が生じており、厳正な処罰の適用を求める声や、ルールをより厳格化していこうとする動きに象徴されるように、集団の秩序を維持するためにマイノリティとして存在する「しんどい子」に対する排除が生じていた。他方、「しんどい子」が学校のマジョリティを占めている南中では、生徒の背景に応じた差別的処遇は正当化されている。こうしたことが可能になっている背景として以下3点が挙げられる。一つ目は、校区の歴史性である。南中には、同和地区生徒に対する教育の伝統があり、このことが、「特別扱いすることの正当性」を実践の中に生み出したと言えるだろう。二つ目は、校区の階層的背景の均質性である。南中の場合、地域の階層的背景がブルーカラー層で占められており、また、定住傾向も強い。そのため教師たちが、「うちの子はしんどい」という共通の言語を持ちやすく、これが結節点となり、指導の論理が組み立てられやすいと言える。三つ目は教師としてのやりがいや手ごたえが南中の場合大きいことである。学校教育の影響が相対的に小さい北中生に対して、南中生にとっては、社会化機関としての学校の役割がそれほど縮小されておらず、教師と生徒の信頼関係に基づいた道義的責任を果たしていくスタイルが未だ成立する余地があることも、「しんどい子」が学校から排除されることに一定の歯止めをかける要素になっている。

以上のように、学校教育からの離脱を最小限に押しとどめている南中の在り方は、社会的不平等の克服に向けて公立学校が目指し得る方向性を指し示しているといえるだろう。だが、そこに問題がないわけではない。たとえば、「現場の教授学」は、秩序の維持を第一義的な目的とするという性格を有しているため、それがより優先されれば、階層に応じた教育行為は、生徒との文化葛藤を起こさないための消極的な意味合いしか持たなくなる。そしてまた、「高い達成を望まない親や子ども」という文化的イメージの固定化によってもたらされている教師の諦めが、生徒に十分な学力をつけられておらず、それによって格差構造が温存化されていることや、高校中退につながっていることの問題性も指摘した。また、学校組織が抱える実践的課題として、個々の教師の善意や献身、職人芸的な力量に頼るシステムの限界についても述べた。

以上のように、南中における実践には、解決しなければいけない課題が多く含まれている。しかしながら、こうした課題を認識した上で、改めて、「生きた社会の再生産にまといつく不確実性のあり方を変える手がかり」として、南中における教育行為の特徴として浮かび上がってきた「感情資本（Emotional capital）」の重要性という論点を提示した。南中は、感情資本が豊富に蓄積された学校と言え、そのことは、生徒の学校肯定感を高めることや、学業達成に少なからずも貢献している。日々のやりとりを通した情緒的資源の投資は、教師に対する生徒の信頼感の高さや、クラス雰囲気の良いを生み出している。さらに、学業達成への効果については、南中生の学習へのインセンティブが、他者からの承認といった人間関係によって枠づけられていることから明らかであり、かれらの学習意欲を高める上で効力を発揮していたと思われる「自主ノート」についても、「教師にほめられたい、認められたい」という想いを受け止め、それにとことん付き合うことが、生徒のやる気を引き出したのだと考えられる。また、通常の授業時においても、笑いを交えた相互行為を展開することによって、フォーマルカリキュラムの伝達だけでは退屈し、お客様状態に陥ってしまう生徒をなんとか授業に引き込むことを可能にしていたと言えるだろう。学校における感情資本の重要性は、ともすれば容易に排除されがちな生徒が多い南中のような学校において、より際立つものである。学校教育の限界について把握しておく必要はあるものの、感情資本の社会関係資本や文化資本への転換は、社会的包摂を目指す学校づくりの、ひとつの可能性を提示していると言える。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (伊 佐 夏 実)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	志水 宏吉
	副 査	教授	木村 涼子
	副 査	准教授	園山 大佑

論文審査の結果の要旨

本研究は、日本の公立中学校において、教師たちの日常的な教育行為の中にあらわれる生徒の出身階層による影響を、社会学的フィールドワークの手法を用いて解明しようとしたものである。

これまで日本の学校では建て前的な平等主義的が支配的であり、そのもとで展開されてきた学校社会学的研究においても、教育行為に対する生徒の階層的要因の影響が直接に問題化されることはほとんどなかった。本研究では、同一自治体内（兵庫県A市）にある階層的背景が対照的な2つの公立中学校が対象として選定された（中産階級的な北中と労働者階級的な南中）。そして、長期にわたる参与観察調査、保護者および生徒に対する質問紙調査の分析を通じて、生徒の学校体験・家庭での子育て・教師たちの教授法のそれぞれについて比較の視点からの検討が行われ、階層的背景にもとづく差異の様相が多面的に明らかになった。

本研究で見出された知見は、以下の3点に集約することができる。第一に、生徒文化の分化に関して、従来支配的であった「地位欲求不満説」よりも「文化葛藤説」の方が当てはまりがよいこと。労働者階級的な南中で成績という一元的価値が生徒に内面化されていないのは、そもそも学歴獲得競争に参加することによって得られる高い地位達成を彼らが望んでいないからだということが示された。第二に、保護者の教育観・子育てのあり方に関して、子どもの将来に対する意識や学歴志向意識において最も顕著な差異が見られたこと。計画的に教育費を蓄え、子どもに高い学歴を望む北中保護者（＝「教育する家族」）に対して、南中の保護者は、幸せな生活と学歴取得は別物で、放任主義的な側面が強かった。第三に、上のような違いを背景として、両校の教師たちは異なる「現場の教授学」を発展させていた。すなわち、北中では教師と生徒が必要以上に近づかない「ぶつからない統制システム」が成立していたのに対して、南中では情緒的資源を活用した人格的コントロールによる「つながる指導」が展開されていた。このような南中の指導は、「感情資本」の重要性という論点へと接続可能であり、生徒たちの学校からの離脱を最小限に食い止めているという意味で社会的な不平等の克服に寄与すると言いうる。

このような知見を提示している本論文は、学校社会学の領域における画期的な労作だと言えることができる。その意義は、以下の2点に整理可能である。第一に、欧米で展開されてきた文化的再生産論の枠組みを日本の学校にうまく適用し、現代日本における生徒の階層的背景と教師の教育営為とのダイナミクスを丹念かつ精緻に描き出していること。第二に、結論部分で「感情資本の、社会関係資本や文化資本への転換」という理論的テーゼを引き出すことで、社会的包摂をめざすこれからの学校づくりの指針を示すという実践的インプリケーションを提示していること。

対象校の階層的背景のさらなる探究、質的なフィールドワークと量的な質問紙調査との効果的接合、今日的な不平等研究・社会的排除に関する研究への理論的言及などの諸点に関して、いまだ改善の余地は残っているが、上述のような本論文の知見の豊かさと意義の大きさはそれらを補って余りある。以上より、本論文は、博士（人間科学）の学位授与にふさわしいと判断される。

